

俗語訳成立史(下)

田 中 康 二

四、辞書への応用

『古今集遠鏡』が出版されて、古典文学研究へのアプローチの中に新たな方法が加わった。言うまでもなく俗語訳である。雅語で記された文章を俗語に直すことにより、直読直解が可能となる。しかも、初学者への指南のためにもなる。だが、古典文を俗語に訳するためには、当然のことながら雅語の知識が必要になる。そのために辞書が要請される。もちろん、それまでも古語辞典は存在した。古くから『節用集』があり、近世には版を重ねていた。楫取魚彦『古言梯』(明和二年序)や谷川士清『和訓栞』(安永六年)などは国学者による古語辞典である。しかしながら、その多くは漢字の読みを示しただけのものであり、出典や解説が付されたものもあつたが、俗語訳を付したものはなかった。そういった中で『古今集遠鏡』が出た後、俗語訳を付した辞書が作られたのである。

鈴木胤『雅語訳解』が出たのは文政三年のことである。収載語数はおよそ一四〇〇語で、市岡猛彦が序を記し、凡例を置いてイロハ順で言葉を並べたものであつた。凡例を少しずつ検討したい。

今の世の俚言は俗語なり。古今集以来の歌、又は詞書の語、又は物語ぶみなどの、今の世に耳なれぬ詞、或は詞は同じけれども、意ばえの異なるなどは、雅語なり。万葉集以上、古き祝詞の類、又古事記書紀にある、尋常の雅語よりも、猶耳遠き詞は古語なり。是は古学の諸先師の注釈によりて、古語訳解といふものを別に著はすべし。今あげたる雅語の中には、此古語のかはらぬもあり。又は同じ詞ながら意の転りたる、或は文字ごゑ異国語のまじりたるなど、古語より見れば、まことは当時の俗語なれども、今よりみれば、雅語ともいひつべし。

まずは「俗語」と「雅語」の違いを説明するところから始めている。ここである「雅語」とは古今集以降の歌、物語などの言葉であるという。また、「雅語」と「古語」とは異なり、「古語」とは万葉集、祝詞、古事記、日本書紀などの言葉を指すという。現代とは少し異なる分類である。「古語訳解」については後述する。そして、「雅語」も「古語」から見れば「俗語」であるというのであるが、これは言葉が歴史的な存在であることの証拠であらう。次に、書名にもなった「訳」と「解」について言及する。

○訳とは、此雅語を今の俗語にあつるをいふなり。一つ語に訳あまたあるもあり、又はあまたの語の一つ訳に帰るもあり。

○解とは、訳にて明しがたく尽しがたき所をば、注釈の詞してとくを云。

○解より訳の便りよき事、先師の古今遠鏡に論ぜられしが如し。此書は遠鏡に本づき、または諸先師の注釈によりて、訳解を兼用て、雅語を部類して、検討に便ならしむ。雅文の書を見む人、参考の助けとならずしもあらじ。

「訳」とは「雅語」に「俗語」をあてることを言う。『雅語訳解』では雅語を項目として、それに充当する俗語を置くという形である。それに対して「解」とは注釈を指すという。「訳」と「解」の違いについて、『古今集遠鏡』を踏まえて、「訳」を重視する立場を取る。また、『古今集遠鏡』や先行諸注釈に基づいて、雅語を収集して辞書としたとい

うわけである。この他に、注釈を見ればわかる体言（名目の語）は省き、意味がわかりにくい用言（活語）を多く載せたことなどが記されている。

それでは、どうして雅語の辞書が必要なのか。「凡例」で次のように述べている。

○すべて詞は俗に同じくて意の異なるには、ことに心をつくべきわざなり。又一つ詞の内に、俗語と同意なると異なることあるは、異なる方のみを訳せり。いそぐにシタクスルと訳をつけて、俗にいそぐといふと同じことなる方をいはざるが如し。

雅語と俗語の意味が異なる場合が問題というのである。「いそぐ」は支度するという意味のほかに、「急ぐ」という意味もあるが、同義である場合には省略したという。つまり、古今異義語のみが研究の対象であるというわけである。それはこの辞書が、言葉そのものの研究というよりは古典文を読む際の便宜となることを目指したものであることを意味する。そのことを次のように述べている。

○初学ウキマナヒの人雅文書ミヤビブミをよむ時、此書を傍に置いて考へ見たらんには、助となる事あるべし。若雅文をかゝんとて、此書のみをとらへて拠とせば、たがふ事多かるべし。すべてことばの細かなる心ばえは、訳と解にても猶わきまへがたくさとし難き事の多かるを、そはたゞ雅文を熟ウツらによく見て、其ある様によりてぞ、心得もし、書もしつべきわざなりける。

初学者が雅文を読む時に座右に置くべき辞書であるという。問題はその後である。雅文を書く時に本書だけを頼りにすると、間違ふことが多い。言葉のニュアンスを正確に知るためには、実際の雅文を熟読して体得するしかないという訳である。それゆえ、『雅語訳解』は雅文を読むためのものであり、雅文を書くためのものではないということに

なる。これは歌を詠むためではなく、歌を読むために記された『古今集遠鏡』の精神を引き継いだ辞書といつてよからう。なお、村上忠順が約一六〇〇語を増補し、安政五年序で『雅語訳解大成』を刊行している。

さて、鈴木胤は古今集以降の言葉は『雅語訳解』に集成したが、万葉集以前の言葉については「古語訳解」の名をあげて予告するのみで、未刊に終わった。この遺志を受け継ぎ、上代の「古語」を集成することを目指したのが、萩原広道『古言訳解』である。西田直養の序を置き、約一五〇〇語を収載して、嘉永四年に出版された。広道は「凡例」（嘉永元年十一月）に次のように記している。

此書は先達鈴木氏が雅語訳解の例に効ひて上古の言を今世の俚言に訳して解たるなり。さるはかの雅語訳解の便よきにつけて古言の訳解もあらばやと思ふに、既に彼書の凡例に古語訳解といふものを別に著すべきよしは見えながら、其書いまだ板本には見えざるゆゑに暫くその代にとて撰みたるなり。されどもいと急に思ひ起して輯めればなほ遺れる語も多からむを、其はまたつぎに輯め置て拾遺に挙べし。

これによれば、広道は明らかに『雅語訳解』を継ぐ意図のもとに『古言訳解』を編集したことがわかる。したがって、「訳」（俗語訳）と「解」（語釈）を併置するという形態や「用語」（用言）を中心にする収集方針を踏襲するなど、『雅語訳解』の上代語版を目指したのである。ただし、『雅語訳解』がイロハ順で言葉を配置するのに対して、『古言訳解』は五十音順で配置しているということが異なる。これについて、「凡例」には次のようにある。

○此書は譬へばよにいはゆる字引の類にて、語の義を頓に心得しめむ為にしたるばかりなれば、書を読んで通えがたき語のあらんをりなどに五十音の次第もて引出て、これは何の義ぞとやうに心得べし。歌文章つくりかゝん時などに、下に注せる俚言を

本として、上なる古言イニシヘコトをその意なりとしては用ふべからず。さるは注の訳語ワツシコトバは其本語の出処にかなふべきやうをのみ考へて記せるなれば、俚言キョトリゴトの意を本としては違ふこと多かるべければなり。

この書は「字引」であつて、古典籍を読んで語義がわからない時に用いる即効性が売りであり、五十音順というのはそのための便宜であるという。このことは現代における辞書の通常の用法であるから、全く違和感がない。問題はその後である。『雅語訳解』と同様のことを述べている。すなわち、歌を作り文章を書く時に、本書の俗語を見てその上に立項してある古語をその意味として用いてはいけなさと記している。それというのも、本書の訳語は、古語の出典となる文脈にあう意味の俗語を選択したから、その俗語に基づいて古語の意味を推し量つてはいけなさいというのである。要するに、歌文の実作の用途に用いることを禁じているのである。このことは実は大きな問題である。というのも、当時の辞書や類書は、歌文の実作に資することを第一の目的として作成されたものだからである。歌を詠むために類題集が作られ、文章を書くために文範集が編集されたわけである。それと同様に、辞書も歌文作成のために仮名遣いを確認したり、意味を調べたりするのが基本的な用途であつた。そういった中で、『雅語訳解』から『古言訳解』へと受け継がれた精神は、古典文学読解に専ら供するという役割である。

このことは何を意味しているのか。通常の古典注釈や辞書は、むしろ古典文を読解するためのものではあるが、それとともに歌文作成のためのものであつた。ところが、俗語訳の付いた注釈や辞書は、第一義的には初学者向けという目的であるけれども、そのことは必然的に歌文作成のためには不足ということであり、その用途としても読解のためだけに供するという役割を担うことになつたのである。つまり、実作のためにあつたものが、啓蒙的要素が混在したために、読解用にシフトしたということだ。それは歌文の実作と古典歌文の研究を両立させていた国学が、古典歌

文研究を専門とする国文学へとシフトする時代と共振していた。俗語訳はそのような過渡期に登場した古典文学への接近方法であったと言ってよからう。

五、増殖する「遠鏡」

『古今集遠鏡』は和歌全文を俗語訳するという画期的なものであったが、これを和歌ではなく散文作品に応用する者が現れた。栗田直政が『源氏遠鏡』（文政十一年五月序）を執筆し、天保十三年八月に刊行したのである¹⁵⁾。直政は鈴木胤の門弟であるから、宣長の孫弟子に当たる。『源氏遠鏡』は若紫巻を丸ごと俗語に訳したものである。版本には不掲載であるが、そこには「凡例」があり、鈴木胤の添削が加えられている。その中に次のような文言がある。

紫文蠶囀とて、桐壺・帚木・空蟬の三巻を通俗にしたる本あり。そのときかたは、よろしからざる所々もあれど大方は初学の人に便りよき物なれば、此書は其緒を續、さて若紫より書初めて、訳は古今遠鏡にならひてさとびことにて、物しつ。蠶囀は本文を載せざれども、此書は遠鏡の如くことごとく本文をあげてまた本文の詞を訳の旁にも所々いさゝかづ、つけたるは、彼詞は此訳に当れり、とよむ人の、はやく心得んに便ならしむる也。雅語を訳するに、此国にて聞ゆる訳も、彼国にては聞えざるもあれど、例の遠鏡に倣ひて、大体中国の詞にうつしたる也。

第二節でも言及した『紫文蠶之囀』をあげて、これを継いで若紫巻を俗語訳することを述べている。訳語の傍らに原語を付すことや「中国の詞」（京言葉）を用いることなど、さまざまなレベルで『古今集遠鏡』を踏襲するともしている。具体的に見てみたい。

すゝめの子をばいぬきがにがしつる。ふせこのうちに、こめたりつるものをとて、いとくちをしと思へり。このゐたるおとな、れいの心なしの、かゝるわざをしてさいなまるゝこそ、いとこゝろづきなけれ。いづかたへかまかりぬる。いとおかしうやうゝなりつるものを。からすなどもこそ見つくれとて立てゆく。髪ゆるらかにいとながく、めやすき人なめり。少納言のめのとぞ人いふめるは、この子のうしろみなるべし。

イヌキガスゞメノコヲニガイタ フセゴノ中ヘイレテオイタモノヲトテキツウ残^レ念ガレバ カノ居タル一人ノオトナガ云ケルハ アノ例ノトツハツモノガ ソンナ^ナヲ致シマシテ 御キゲンヲソコネルコソ イツソフツガウナ事ナレ 雀ノ児ハドツチヘマキリマシタヅ コノゴロハヤウゝトイツソアイラシウナリマシタニ ヒ^レヨツトカラスナドガ見ツケテハトテ立ッテユクウシロスガタ 其髪ノユツタリト長イ所トイヒ ズンド見^メグルシカラヌ人ナリ 少納言ノメノトト人ノ云様子ナルハ 此児ノウバニテ スグニモリヤクニナツタト云ヤウナ^ナナルベシ

光源氏が若紫を見初める場面である。この場面における俗語への訳出の技法について、項目別に検討を加えていくことにしたい。

〔語法〕「つ」や「ぬ」は「タ」と訳しているが、これは『古今集遠鏡』「例言」に次のようにあるところを踏まえている。

○ぬぬる、つつる、たりたる、きしなど、既に然るうへをいふ辞は、俗言には、皆おしなべてタといふ。なりぬなりぬるをば、ナ^キツタ、来^キつ来^キつるをば、キタ、見たり見たるをば、見タ、有き有しをば、ア^メツタといふが如し。タは、タルのルをはぶける也。

「既に然るうへをいふ辞」とは、現代では過去や完了などと称する助動詞であり、これらをすべて「タ」と訳すという。二箇所「めり」については、前者は訳出を省略しているが、後者は「様子ナル」と訳している。前者を省略したのは、「見グルシカラヌ人」（めやすき人）という表現との重複を避けるためであろう。なお、ここで視覚表現や「めり」が多用されているのは、これが光源氏が垣間見する場面であつて、源氏に寄り添った語りだからである。また、「からすなどもこそ見つけ」という箇所を「カラスナドが見ツケテハ」と訳しているが、これは『詞の玉緒』五之巻に「もこそは行末をおしはかりてあやぶむ意の辞也」とあるところを踏まえ、しかもさりとてうまく表現している。

〔語彙〕「いとくちをし」を「キツウ残念」と訳し、「さいなまるゝ」を「御キゲンヲソコネル」と訳すのは、文脈に合わせた適訳である。また、「心なし」を「突発者」と訳し、「うしろみ」を「守り役」と訳すなどは、原語を傍記する必要を感じるほどの思い切った訳であるが、俗語の醍醐味と言えよう。

〔語順〕冒頭の「すゝめの子をばいぬきがにがしつる」について、「イヌキガスゞメノコヲニガイタ」と、主語と目的語の語順を変更して訳している。これは若紫の台詞なので、そのままの方がニュアンスが伝わるという考え方もあるが、語順を変える方がわかりやすいと判断したのであろう。

〔補足〕「雀ノ児ハ」という主語を補ったのは動作主が入り組んでいるという判断であろうし、「立てゆく」の後に「ウシロスガタ」を補うのは、直後にゆつたりとした髪描写があるからであろう。いずれも適切な処置と考えられるが、原文にない言葉を補った際に記す傍線が付されているのは誠実な対応と言つてよからう。

もちろん、源氏物語には数多くの歌が詠まれている。それらは『源氏遠鏡』の中でも俗語訳の対象となっており、若紫巻に収載された歌を俗語に訳している。全二十五首のうち、巻名の由来になったとされる源氏の歌を見てみよ

う。義母の藤壺への断ちきりがたい思いを抱きつつ、源氏はその血筋である紫上に懸想して歌を詠む。

源氏

てにつみていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草

○藤ノ花ハ紫色ニサクガ 其紫ニユカリノアル野辺ノ若草ヲ オレガツンデ手ニ持テ見ル^二ハ イツノ^二カイマア^カ 藤壺に
似たるその姫の紫の上をいつ我手にいれむと云意也。紫の上を草にたとへたり。

歌の訳出法はほぼ完全に『古今集遠鏡』を踏襲している。傍線は和歌本文にないところであり、傍記の数字は句番号を示す。この歌の場合、二句切れであるので、三句以下を倒置して訳しているわけである。また、「かも」のように多義の助詞については、「カイマア」という訳に傍記するという処置を取っている。ここでは『詞の玉緒』四之巻に「これはもは添たる辞にてたゞかといふ意也」と解説する用法である。さらに、末尾には訳だけでは伝達しきれない、和歌技巧や比喩などを簡潔に説明している。いずれも『古今集遠鏡』の手法を源氏歌に適用したものであり、源氏物語の地の文の俗語訳の中に完全に溶けこんでいて、違和感なく馴染んでいると言つてよい。

近世後期には雅俗相互翻訳への関心が高まり、黒沢翁満『雅言用文章』（嘉永五年序）なども刊行された。その凡例には「古歌の詞を今の俗語に翻訳もて其心を明らかにする事は本居氏の古今遠鏡より始りて」と紹介している。そういつた中で、雅語を俗語に訳すという『古今集遠鏡』の手法を古今集以外の歌にも適用し、歌言葉に俗語を付したものを集成した書物が作られた。佐々木弘綱による『歌詞遠鏡』である。安政四年三月の井上文雄の跋文が付されているが、実際に出版されたのは明治二十五年になってからである。古今集以降の体言と用言のみを採集して、イロハ順に並べ、天地人の三巻にまとめた。文雄の跋の他に、東久世通禧の序（天）、本居豊穎の序（人）、佐々木信綱の跋（人）

が付されている。天巻巻頭の「凡例」を順に検討していきたい。

一、此書は弘綱、足代家に留学せし頃、かりそめに物して師翁に一わたり訂正をこひたれど、若き時に物しつるなればひがことも多かるべし。

佐々木弘綱が足代弘訓のところに留学していたのは、弘綱が二十歳であつた弘化四年九月から弘訓が死没した安政三年までの間である⁴⁰。これによれば、本書が足代弘訓の添削を経ていることがわかる。

一、歌詞遠鏡といへる名は、鈴屋翁の古今集遠鏡の初学の人に便よきにならひて、歌ごとにわきがたきふしに俗言をあてつるなればしかなづけつるなり。

この条には書名の根拠を記している。もちろん本書は『古今集遠鏡』に拠っている。弘綱は鈴屋派とは系譜を異にする国学者であるが、古典解釈の手法として俗語による訳を選択したわけである。凡例の最後の項目で次のように記している。

一、すべて雅言に俗言をあつる事は世の人たやすき事のやうに思へど、いとしくきわざにて、うまくあたりがたきものなり。又俗言は所々にてたがひあり。此書は伊勢の方言もてししたれば、他に通ぜぬ事もあるべし。見ん人その心してよ。

「雅言」に「俗言」を当てることが案外困難であることに言及している。訳出には「雅言」に対する深い見識とともに、「俗言」における豊かな語彙が必須なのであり、両者の折り合いの中から絶妙の訳が生まれるのである。初学者

向けであるからといってたやすいわけではない。その上、「俗言」は土地ごとに違いがあるから、他の土地の者には通じないこともあるという。つまり、「俗言」には「雅言」との時間的な隔たりと、他の土地の「俗言」との空間的な隔たりがあるというのである。ここには古典文学を解釈する際に、俗語訳が有効であるということだけでなく、訳出することそれ自体の難しさや訳語の理解や伝達ということに對する疑いが表明されていると言つてよい。このような認識は訳出ということがはらむ本質的な問題を伝えるものであつて、俗語訳が万能であると考える風潮に一石を投じる役割を果たしたと言えるのではないか。とりわけ、後者は標準語や共通語という概念がなく、なおかつそれが必要とされた時代ならではの問題意識であり、宣長が「京わたりの詞」を用いて済ませた頃とは時代が変わつたのである¹⁷⁾。

それはともあれ、『歌詞遠鏡』を具体的に見てみたい。「伊の部」冒頭の「いろどる」は次のようになっている。

いろどる 染る
古秋上 キツウ早ウマア いとはやもなきぬる雁カナか白露ソメルのいろどる木々ももみちあへなくに
後秋上 キツウ早ウマア 秋萩をいろどる風はふきぬとも心はかれじ草葉アサノハならねば

「いろどる」について「ソメル」という訳語を採用し、これに合う用例として二首あげている。あたかも訳語が主で、用例が従という形式である。これは『歌詞遠鏡』が文字通り歌語辞典であることを意味している。これを習得することによって、古歌を自らの手で訳す力を身につけることができるということであろう。よりいっそう初学者への配慮が前面に出された書物ということができる。なお、『古今集遠鏡』は一首目の歌の当該箇所を「色どる」のままとして、俗語に訳していない。

雅語を俗語に訳す際に発生する方言の問題は、明治政府が近代国家として出発する時の「国語」創出の問題とリンクするものである⁽¹⁸⁾。鴻巣盛広『新古今和歌集遠鏡』が出版された明治四十三年二月には、「国語」の問題は一定の方向性が出ていた。各地方の方言がほぼ同等の力関係であった近代以前から、近代国民国家の象徴としての「国語」という観点から標準語が整えられ、それが方言に優越する近代期に移行する中で、「口語」については標準語を用いることにより問題を解決した。『新古今和歌集遠鏡』『凡例』には次のように記されている。

- 一、本書は本居宣長の「古今和歌集遠鏡」に倣い、口語を用ゐて新古今和歌集を註せるものなり。
- 一、口語は現代標準語に拠れり。

「俗語」を「口語」としているが、これを「現代標準語」に統一しているというのである。それ以外は『古今集遠鏡』に準拠して新古今集歌を訳している。次のごとくである。

百首の歌奉りし時。

藤原家隆朝臣

谷川のうち出る波もこゑたてつ。鶯さそへ、春の山かぜ。（春上・一七）

春風ニ解ケタ谷川ノ氷ノ間カラシテ打チ出ス波スラモ面白イ声ヲ立テ、居ル。ダノニ春ニナレバ鳴クモノトキマツテ居ル鶯ノ鳴ク声ガ聞エナイ。早ク鳴クヤウニ鶯ヲ催促シテクレ、春ノ山風ヨ。古今集の「谷川にとくる水の隙ごとに打出る波や春の初花」「花のかを風の便にたぐへぞ鶯さそふるべにはやる」の二首によれり。

まず、詞書や歌本文に句読点が付されていることを指摘しておこう。「凡例」には次のように書かれている。

一、歌に句読は要なきが如くなれども、意義を解く上に於て便利多ければこれを付したり。句読は独立したる文章に分るゝを示す場合の外、歌の中途に付することなし。文法上終止形となりながら、読点を用ゐたるは、倒置法即ち下よりかへりて続く体なるを示せるなり。

やはり初学者への便宜のための処置である。使うのは原則として句点であるが、倒置法の場合のみ読点を用いるという。当該歌の場合、第四句が命令形であるが、下句が倒置法なので読点にしたということである。これは当時の和歌表記の作法であつて、取りたてて珍しいものではない。口語訳と同じく、啓蒙と普及を主眼とした注釈法といえよう⁽⁹⁾。このこと以外は『古今集遠鏡』に準拠したやり方で口語訳および注釈をおこなっている。「遠鏡」の精神が近代にも受け継がれたのである。

なお、鴻巣は東京帝国大学で万葉集を学修し、大学院進学後は広く和歌史の研究をしたという。純然たる国文学徒である。大学では芳賀矢一や佐佐木信綱に学んだという⁽¹⁰⁾。国学の方法論が近代国文学へもなだらかにつながっていることの証左と言つてよからう。

六、近代口語訳へ

前節で取り上げた『新古今和歌集遠鏡』はすでに近代の口語訳であつた。その後も古典文学の口語訳は広がりを見せ続ける。大正五年には折口信夫『口訳万葉集』が文会堂書店から刊行された。芳賀矢一の編にかかる「国文口訳叢書」の一篇として出版されたのである。「口訳万葉集のはじめに」の中で、折口は次のように述べている。

□評釈に用ゐた用語は、大体、標準語によつた積りであるが、散文と違つて、律文では、情調を完全に表す為には、千篇一律に、である・でないで、おし通すことが出来ない。さうした間隙にもつて来て、わたし自身の語なる、大阪ことばの、割り込んで来たのも、随分あつたと思ふ。譬へば言つて・しまつてを、言うて・しまつて、知らない・取らないを、知らぬ・取らぬといふ類であるが、かういふ風に、この訳文に取り入れた、方言的の性質を帯びた語も、まんざら、反省なしに用ゐた訣でもないのである。

口語の選択という問題について、正直に告白しているのである。口語は「標準語」を基調にしたが、千篇一律になつては駄目である。「律文」（詩歌）では「情調を完全に表す」ことが重要だからである。その上、折口のお国言葉（大阪ことば）が出てしまつてゐるが、それは無反省に用いたわけではないという。この文脈の中では、「方言的の性質を帯びた語」すなわち「大阪ことば」を用いた方が「情調を完全に表す」ことができるということが理由であらう。和歌を口語訳する際の工夫ということであらう。折口が大阪出身ということもあるが、近代になつて標準語という概念が生まれた後でも、口語訳には方言の問題が横たわつていたのである。

また、この序文の最後に、折口は大阪の中学校に赴任した時のことを回顧し、その三年間に教えた生徒のことを懐かしく思い出しながら、「この書の口訳は、すべて、其子どもらに、理會が出来たらう、と思ふ位の程度にして置いた。いはゞ、万葉集遠鏡なのである」と記して序文を結んでいる。むろんこれは「古今集遠鏡」を踏まえている。「遠鏡」の精神は健在なのである。巻一卷頭の長歌を見てみよう。

天皇御製

籠もよ、み籠持ち、掘串もよ、み掘串持ち、この岡に菜つます子、家宣らへ。名宣らさね。空見つ大和の国は、おしなべて吾

こそ居れ。しきなべて吾こそ坐せ。吾こそは宣らめ、家をも名をも。

雄略天皇の詠歌である。前節で見たように、句読点を付するのはこの頃の習慣である。これを折口は次のように口語訳している。

籠や、篋^へや。その籠や、篋を持つて、この岡で、菜を摘んでみなさる娘さんよ。家を仰しやい。名をおつしやい。此大和の国は、すつかり天子として、私が治めて居る。一体に治めて私が居る。どれ私から言ひ出さうかね、わたしの家も、名も。（上代に於て、如何に皇室が簡易生活をしてゐられたか、此御製で拝することが出来る。殊に素朴放膽で入らせられた、雄略帝の御性格は、吾人の胸に生きた力を齎す。）

なめらかな口語による訳文と言つてよい。ほぼ現代における口語訳の原形である。末尾に注釈を置くところも『古今集遠鏡』を踏襲している。

現代における古典文学の注釈として、口語訳が有力な方法であることは異論の余地はない。それは古典理解の手法であると同時に、古典を啓蒙する手法でもある、必要欠くべからざるアプローチと言えよう。その手法は宣長によつて完成され、連綿と現代まで受け継がれて来たのである。

註（前号掲載の（上）に続けて通し番号のかたちをとる。）

(15) 尾崎知光・野田昌『源氏遠鏡』（勉誠社文庫、一九九一年六月）「解説」参照。

(16) 『弘綱年譜』による。高倉一紀編『佐々木弘綱年譜（上）——幕末・維新期歌学派国学者の日記——』（皇學館大学神道研究所、一九九八年三月）参照。

- (17) もちろん宣長も「伊勢の方言」を常用言語とし、京への留学経験があったので、方言同士が通じないということは認識しており、「俗言は、かの国この里と、ことなることおほき」と『古今集遠鏡』『例言』に記している。宣長が京言葉を訳語に用いた背景には、時間の隔たりはあるが場所の隔たりがない京の言葉が最適であると考えたものと推定される。
- (18) 安田敏朗『「国語」と「方言」のあいだ―言語構築の政治学』（人文書院、一九九九年五月）参照。
- (19) 釈超空（折口信夫）は『海やまのあひだ』（改造社、一九二五年五月）「この集のすゑに」の中で、歌に句読点を打つことの意義を読解の便宜以外の要素にあることを主張している。
- (20) 『新古今和歌集遠鏡』（博文館、一九一〇年二月）「序」参照。

【付記】 本稿は二〇一三年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「本居宣長の国学の受容と国文学の成立に関する総合的研究」の成果の一部である。

（たなか こうじ・神戸大学大学院人文学研究科教授）